

学校教育目標	「やりぬく～かしこく やさしく たくましく」 お互いを大切にし、主体的に学び続ける児童の育成	経営理念	めざす学校像「わかる できる かわる たのしい」学校 教職員が一体となり、家庭・地域と共に、これらの社会を力強く生き抜くために必要な資質・能力 「知識・技能、課題発見・解決能力、自己調整力、協働性」の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動を推進する。
--------	---------------------------------------------------	------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価計画				自己評価				学校関係者評価 (学校運営協議会による評価)		改善方針					
項目	重点	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	達成値		達成率	評価	結果と課題の分析	評価	コメント	改善方針		
						11月	1月								
確かな学力の向上	1	自ら学びを求め児童の育成	○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進	・児童の自己調整力と学力の向上を目指した学習指導の工夫 ・目的のある家庭学習(帯タイム/くぐんタイム)との連携、「やる気」勉強の実施	◇教師の実践力評価 【肯定的評価3.2以上(4段階評価)】※研究授業で教師の相互評価	3.2	3.18	3.19	100%	3	12月に実施した研究授業後に、教師が記入した授業力分析シートの結果は、肯定的評価が3.19となり、目標値に近い数値となった。「見通しをもって授業に参加している」「児童は、学び方を工夫しながら学習している」の項目における肯定的評価が高かった一方で、「児童は、学習方法のよさや課題を振り返っている」の項目での評価が低かった。学習過程の中で振り返りの場の設定が十分とはいえなかった。児童の自己調整力と学力をより向上させるために、視点を明確にした振り返り(自己省察)の場を意図的に設け、次への学習につなげていけるようにしたい。	B	・授業方法や取組がよい。児童に選択の場を与えるのはよい。 ・「振り返りの場」を今後どのように設定するのか具体的に示す必要がある。保護者にも周知する。	・授業力の向上に向けて、今年度の取組みの振り返りをふまえ、具体的な振り返り方法を検討する。 ・「振り返りの場」の設定等学校の取組について、学校だけでなく家庭にも周知する。	
					◇学力の実態調査 NRT・標準学力調査の正答率40%未満の児童の割合【10%以下】※学力検査結果	10%以下	11.8% 算	8.5% 算	12.2%	97%	3	学力調査の結果を比較すると、正答率が40%未満だった児童の割合は、国語科・算数科ともに、後期は前期の数値を下回ることができた。目的意識を明らかにして学習に取り組んだ結果、児童の基礎・基本となる学力を定着させることができたと考えられる。国語科では目標値を達成することができた一方で、算数科では目標値の達成には至らなかった。算数科を中心とした帯タイムの取組を継続し、計画的に必要な知識の定着を図っていきいたい。また、考え方を説明するなど、知識を活用して学習を行うことで、自己調整力と学力の形成につなげたい。	B	・帯タイムの継続はよい。 ・正答率40%未満の児童の割合だけでは評価は難しい。 ・つまりその児童への支援が必要である。 ・算数で10%を超えているのは、課題が大きい。	・児童のつまずきを把握したり予想したりし、一人一人にあった個別の支援の手立てを工夫し具体化する。 ・学校として取組内容を共有し、組織的な取組みとする。
					◇自己の学びに対する意識調査 ・目標をもって学習に取り組んでいる(1・2年) ・目標達成に向け、自己の学び方を工夫している(3～6年) 【肯定的評価80%以上】※児童アンケート	80%	1・2年 93.2%	1・2年 93.1%	112%	4	意識調査の後期の結果は、前期より数値は減少したが、目標値は達成することができた。児童の自己調整力を高めるために、今年度は「動機付け」を高め、目的意識をもって学習できるように指導改善を行ってきた。単元計画を共有する、日常生活と関連させた児童の疑問と結び付けた学習課題を設定する、単元を貫く間から学習のゴールをイメージするなど、児童が自己調整力を発揮し、主体的に学習できるような手立てを考えることができた。学び続けることができる児童の姿を目指していくために、今後は振り返り活動(自己省察)の時間を充実させていく必要があると考えられる。視点を明確にした振り返りを繰り返し経験することにより、より目的意識をもって学びに向かうことができるようになっていきたい。	A	・視点を明確に振り返り、繰り返し経験させることはよい。 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進についての取組が分かりにくい。	・学校における学習指導と家庭学習の実施をどのように関連付けて、より効果のある取組としていくのか来年度に向けて再度検討していく。	
豊かな心の育成	2	「みなが力(みんななかよががんばる力)」を磨く学校生活	○お互いを大切にできる児童の育成	・当事者意識をもたせた生活目標の設定 ・あいさつ名人チェックポイントの積極的活用	◇生活目標に関するアンケート 【肯定的評価:80%以上】※児童アンケート	80%	90.8%	92.3%	115%	4	生活目標に関するアンケートの結果、肯定的評価を示した児童の割合は92.3%であり、11月と同様に目標値を達成することができた。年間を通して各学級によるあいさつ運動を工夫して実施したり、学年朝会において実態に応じた指導をしたりしたことにより、当事者意識をもたせられるように指導を行うことができたと考えられる。今後の取組として、あいさつ名人チェックポイントの活用を含め、あいさつをさらに活発にしていけるように働きかけ、相手を思いやる心を育てていきたい。	A	・相手を思いやる心の育ちは、とても大切である。引き続き取り組みをしてほしい。 ・他人を思いやる心の育成において、あいさつはよくできている。	・家庭や地域とともにあいさつの取組を推進していく。 ・縦割り班活動等の異学年交流や地域の方との交流などを通して、思いやりの心を育てる。	
			○児童相互・教師との信頼関係の構築	・児童の自己肯定感を高め、役割を果たす機会の設定(係活動や当番活動の充実と振り返り)	・児童アンケートの「自己決定」「自己存在感」についての意識調査【肯定的評価80%以上】※児童アンケート	80%	91.5%	91.6%	115%	4	児童アンケートの結果、肯定的評価を示した児童の割合は91.6%であり、11月と同様に目標値を達成し、自己肯定感の高い児童が多かった。学習発表会等の学校行事や各教科等の学習の中で児童一人一人が自分の役割を意識した活動を実施したり、「よいことみつけ」「自分賞」等の児童の長所を称する活動を行うことにより、自己肯定感が高まったと考えられる。しかし、「自分にはよいところがない」と答えた児童は割合としては低いが全校で24名いる。異学年交流の実践や教師との関係をさらに深め、全ての児童の自己肯定感を高める必要がある。	B	・24名の児童にもよいところがあると思う。ぜひ自己肯定感を高める取組を続けしてほしい。 ・24名の今後が気になる。 ・体験活動を通して、意見を言える環境を整えることも必要である。	・「自分賞」や「よいところみつけ」などの取組を継続し、自己肯定感を高める。 ・一人一人の児童に寄り添い、教師による肯定的な言葉かけを増やす。	
たくましい体の育成	3	運動好きな児童の育成	○児童の体力の向上を図る	・「みながピック」の取組の工夫	◇領域別体育技能の実態調査【6月実施の新体力テスト2分間の比較で、記録が伸びた児童の率80%以上】※20mシャトルラン・「みながんばり」	80%		53%	66%	2	6月の新体力テストのシャトルランの結果を1月時点を上回っていた児童は、53%だった。体育の時間の始めに2分間走、夏休み中に室内で行える体づくり運動、みながんばりピックの縄跳びなどで、持久力を高める運動を継続していたが、結果に結びつかなかった。低学年では70.4%、中学年では42.2%、高学年では39.4%と学年が上がるに連れて記録が下がっていた。実施方法にばらつきがあったため、校内で統一させて実施していき必要があった。また、体育の始めに実施した2分間走は、実施方法を検討し、簡易的かつより意欲的に児童が取り組めるものを考えていきたい。	C	・評価方法の見直しと興味ある種目の選定も必要である。 ・1月の結果で、目標値を上回る児童が少ないのは課題である。	・縄跳びの取組は、継続していく。取組の視点を共有し、全校で取組を推進する。 ・評価方法や重点的に取り組む内容の見直しを行う。	
			○運動や外遊びが好きな児童の育成	・「みながトレーニング」の取組の工夫 ・月に1回の学級遊びの機会の設定	◇運動への意欲【肯定的評価90%以上】※児童アンケート	90%	93.9%	94.8%	105%	4	運動が好きな児童は94.8%である。6月のアンケート結果より、1月末に上った結果の方が肯定的評価をした児童は多かった。体育委員会を中心に企画した「全校遊び」や、定期的に体育朝会を実施したことや、ひよんぴょんワークで児童が外に出て、体を動かす時間を確保していたことが、外に出て遊ぶことにつながった。また、月に1回の学級遊びは、全学年実施できたため、みんなで遊ぶ楽しさを味わうことができた。今後も取組みを進めていきたい。	A	・極力外遊びがよい。 ・外でみんなで遊ぶ楽しさは心も身体もたくましくなると言われている。頑張してほしい。 ・運動への意欲はあるがあまり運動ができていない。	・外遊びの励行を継続する。 ・体育朝会で様々な遊びや体づくり運動などを紹介する。 ・学級遊びは、継続して行う。 ・運動ができる場づくりを工夫する。	
信学類校づくり	4	安心・安全な学校づくり	○「学校が楽しい」と感じる教育の創造	・児童にとって有意義な学校行事や総合的な学習の時間の取組	◇学年の取組に対する児童の満足度【肯定的評価90%以上】※児童アンケート	90%	97.2%	95.9%	107%	4	「学校行事は楽しい」、生活・総合の勉強は楽しい95.9%(昨年比+0.8中間比-1.3)児童は学校の取組に概ね満足していることが窺える。「学校は楽しい92.2%」「学校にいるとほっとする86.8%」「授業が楽しい90.7%」の各項目は昨年を上回っており、中間値との比較においても同等である。児童と学習や行事の目的を共有しながら、児童主体の教育活動となるよう取り組んだ結果であるといえる。来年度に向け、今年度の振り返りをふまえ、各教育活動が児童にとってより充実したものとなるように教育計画を作成し実践していきたい。	A	・「学校にいるとほっとする」がすべてを表していると思う。まず満足度の高い学校づくりをしてほしい。 ・とどろきに地域の方と児童が一掃に活動したことは大変よかった。	・時期を定め、カリキュラムマップを活用したカリキュラム・マネジメントによる見直しを行う。 ・外部人材を有効活用できるような情報を整理し共有する。	
			・教職員が働きがいを感じる職場づくり	◇子供と向き合う時間確保ができる等、働きがいを感じる【肯定的評価90%以上】※教師アンケート	90%	96.9%	96.7%	107%	4	教職員アンケート「仕事へのやりがい100%」「子どもと向き合う時間の確保93.3%昨年比-0.5中間比-0.5%」「教材研究や授業準備の時間が持っている50.0%中間比-18.8」児童アンケート「先生と話している83.7%中間比-0.8」会議時間及び内容の精選等を行い、放課後の業務時間の確保に努めたが、業務遂行時間の確保が難しいと感じていることが窺える。1月より教員に1名欠員があり、業務への負担感が増えたためと考えられる。学校行事や各分掌の取組の有効性を検証し、来年度の教育計画の作成に生かしたい。また、1年間の業務に見直しをもたせ、分掌の計画的な運営を促すとともに、4回ある長期休業の有効的な活用を推進してきたい。	A	・「仕事へのやりがい100%」はすごい。これからは頑張っていきたい。 ・先生方の頑張りが伝わっている。 ・一人一人の児童にしっかり言葉かけをしてほしい。	・ICTを有効活用したり、効果を検証し、スクラップ&ビルドにより取組の精選をしたりし、児童に関わる時間をもつ。		

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

達成値/目標値を百分率で表示する

■自己評価

4...目標を上回って達成 3...目標どおりに達成

2...目標をやや下回って達成 1...目標をかなり下回って達成

■学校関係者評価(学校運営協議会による評価)

A...とても適切である B...概ね適切である

C...あまり適切でない D...全く適切でない